

## 小さな都市で「よく生きる」の挑戦

### —イタリア型スローシティ「チッタスロー」運動の理念と展開—

鈴木 鉄忠

#### キーワード

地域づくり スローシティ スローフード イタリア 地方都市 前橋 若者

#### 要旨

本稿の目的は、イタリア発の個性的な地域づくり「スローシティ（イタリア語で「チッタスロー）」とはどのような取り組みかを理解し、日本の地方都市と比較研究を行うための基礎的考察を行うことである。1999年にイタリアの4つの小さな地方自治体の宣言から始まったこの運動は、2021年現在、30の国・地域と272の都市が加盟する活発な国際的なネットワークを形成するに至っている。日本では宮城県気仙沼市（2013年）と群馬県前橋市の赤城（2017年）の2都市が正式加盟している。しかしながら、日本での認知度は高くなく、当該加盟都市の住民もその例外ではない。そこでまずこの運動の歩みと現在の位置を概観する。次にスローシティ運動の根底にある精神を、世界規模の近代化、合理化の「裏をかく」「意表を突く」ことにある点を論じる。そしてこれまで邦訳のなかった「チッタスロー宣言」のイタリア語版全文を丹念に読み解きながら、現代の高度消費社会において、小さな都市で「よく生きる」ことはいかにして可能か、がチッタスロー運動の根源的な問いかけであることを論じる。最後に前橋赤城スローシティをフィールドとした大学教育・調査研究・地域活性化の一体化を目指したプロジェクトの現在地を確認する。

#### はじめに

1999年、イタリアの人口3万に満たない地方自治体からスローシティ運動が誕生した。「より速く、より大きく、より多く」ではなく、「よりゆっくり、より適正な規模と適量を」をモットーに据え、「食」に始まる人間と自然のあり方を根本から見直し、地域の個性と質を大切にする取り組みがスローシティ運動である。当初イタリアの4自治体だった加盟メンバーは、2021年現在、30の国・地域と272の都市が加盟する国際的なネットワークを形成するまで発展している。

現在ではスローシティ運動に関する本格的な調査研究がイタリア国内外で行われている。世界の様々なまちづくりや地域づくりとの関連が検討されるようになっている（Roma

2012 ; Clancy edit. 2018 ; Tranter and Tolley 2020)。日本でも 2000 年代半ばからイタリア研究者を中心にスローシティ運動が取り上げられた(陣内 2006 ; 松永・徳田 2007 ; 久繁 2008 ; 陣内 2010 ; 松永 2010 ; 宗田 2012 ; 島村 2013 ; 大石 2017 ; 島村 2020)。2013 年には日本で初めて宮城県の気仙沼市が加盟都市となった(加藤/上杉 2016)。そして 2017 年には前橋赤城エリアが第 2 号のスローシティ認証を得た(山本 2018 ; 前橋市観光振興課 2019)。

だが日本ではまだスローシティへの認知度は低い。スローシティに加盟している地域住民もその例外ではない(加藤/上杉 2016: 52)。数あるまちづくりや地域づくりのなかでスローシティ独自の特徴とは何か、その良質な実践が日本の中小地方都市にどのような示唆をもたらすのか、世界規模の都市化のなかで“小ささ”を強みにして人間サイズの都市を存続させていくことは可能なのか。スローシティ運動という人口 5 万未満のイタリアの小さな都市の挑戦は、これらの問いに対して魅力的な回答を実証してきた。それゆえ数ある地域実践との比較と応用可能性を検討していくためにも、魅力的だが謎の多いこの運動のさらなる解明が必要といえるだろう。

本稿の目的は、イタリア発の個性的な地域づくり「スローシティ(イタリア語でチッタスロー)運動の根本を理解し、日本の地方都市と比較研究を行うための基礎的考察を行うことである。まずこの運動の歩みと現在の位置を概観する。次にこの運動の根底にある精神を、これまで日本語への翻訳がなく、先行研究でもほとんど取り上げられてこなかった「チッタスロー宣言」を丁寧に読み解いていく。それによって、この運動の根底には、世界規模の近代化、合理化の「裏をかく」「意表を突く」ことにある点を確認する。そして現代の高度消費社会において、小さな都市で「よく生きる」ことはいかにして可能か、がチッタスロー運動の根源的な問いかけであることを論じる。ところで、この運動は机上の空論ではなく、実践してこそ意味がある。そこで最後に、筆者のゼミナールで行っている前橋赤城スローシティエリアをフィールドとした大学教育・調査研究・地域貢献の現在地を確認して結びとする。

以下では基本的にイタリア語名称の「チッタスロー」を用いる。特に断りがない限り、チッタスローはイタリア発の地域づくりであるスローシティ運動を意味する。

## 1 チッタスロー運動の歩み

1997 年、イタリア中部のウンブリア州の人口約 2 万の都市オルヴィエト(Orvieto)にて、第 2 回スローフード国際会議が開催された。このときにスローフード運動の立役者であるカルロ・ペトリーニ(Carlo Petrini)は、「スロー」の哲学に共鳴する都市がネットワークを築いていくのはどうか、というアイデアを披露した<sup>1)</sup>。それから 2 年後、ペトリーニの着想が花開いていく。

1999 年、トスカナ州フィレンツェ県の人口約 1 万 4 千のグレーベ・イン・キャンティ

(Greve in Chianti) のパオロ・サトゥルニーニ (Paolo Saturnini) 市長は、先のペトリーニが同席する会合を設けた。そこに参加したのはイタリアの 3 つの小規模自治体の市長——オルヴィエートのステファノ・チミッキ (Stefano Cimicchi)、イタリア北西部のピエモンテ州の人口約 3 万のブラ (Bra) のフランチェスコ・ガイダ (Francesco Guida)、イタリア南部カラブリア州の人口 4 千に満たないポジターノ (Positano) のドメニコ・マッローネ (Domenico Marrone) ——だった。この会合で「よく生きるための都市間国際ネットワーク」の実現を目指すことを掲げ、法人格を取得し、チッタスロー協会はその歩み始めた。上述の 4 つの基礎自治体がチッタスロー協会の創始メンバーとなり、その本部はオルヴィエートに置かれた (図 1)。



図1 チッタスロー運動の創設メンバーの4自治体

出典：以下の無償ダウンロードのイタリア地図から筆者作成  
<https://www.freemap.jp/itemFreeDIPage.php?b=europe&s=italy>

チッタスロー運動に賛同した 4 つの自治体の市長は、スローフードの哲学を地域コミュニティから地方自治体へ拡大することを目的に据えた。そこではエコガストロノミア、すなわち環境に配慮し、節度をもちつつも食べる喜びを忘れない食との向き合い方を、日常生活のなかで実現することを目標とした。そのための詳細な原則を明文化した。スローな

世界の地域	主な加盟国	加盟都市総数2012年3月	加盟都市数 2021年3月
ヨーロッパ	イタリア、ドイツ、スペイン、ポーランド、イギリス、ベルギー、オーストリア、フランス、オーストリア他	124	227
アフリカ	南アフリカ	1	1
アメリカ	アメリカ合衆国、カナダ、コロンビア	5	7
アジア	韓国、台湾、中国、日本、トルコ	16	33
オセアニア	オーストラリア、ニュージーランド	4	4
合計		150	272

図2 チッタスロー加盟都市

出典：2012年のデータは（Roma et al. 2012: 45）、2021年のデータはチッタスロー協会の公式ホームページを参照して筆者作成

人口データ	イタリアのチッタスロー	イタリアを除く世界のチッタスロー	チッタスローの総計
人口の平均値 2012年	11302	16369	13711
過去10年間における人口増減の割合	+6.6%	+22.9%	+12.2%
65歳以上の割合	23.0	20.1	21.6
14歳以下の割合	12.9	17.2	14.9
移民の割合	7.8	5.9	7.0

図3 イタリア内外のチッタスロー

出典：右記のデータを参照（Manella 2018: 149）

都市の発展には人間生活のなかで自然のリズムを重視すること、おいしい食と健康であることを中心に据えること、景観を守り芸術や文化的な歴史遺産を保存すること、人々の活発な交流が生み出されるパブリック・スペースや居場所の価値を高めること、宗教行事や伝統的職人工芸の価値を再発見することなどが盛り込まれた。

チッタスロー運動はすぐさま大きな反響を呼んだ。結成から2年後には、創始メンバーの4都市から28都市までに加盟都市が急増した。当初の参加都市はイタリア北部に集中していた。だが2001年にはイタリア国外へも広がり、初の加盟都市としてドイツ南部の人口1万2千のハースブルックが正式参加した。2005年にはチッタスローの第1回国際会議が開催され、イタリア国内外の小規模都市のベストプラクティスを共有する企画が軌道に乗った。2008年、オルヴィートで開催された国際会議総会では、チッタスロー運動の国際化の基盤となる憲章を採択した。こうして1997年にスローフード運動から着想を得て、その種を4つの小さな地方自治体が協会という「器」に根付かせ、イタリア国内外に根と枝葉を伸ばしていきながら、「チッタスロー」という独自の生息圏を確立したのである。

2021年現在、チッタスロー運動への加盟は、30の国・地域、272都市に及ぶ。2012年当時と比べると、加盟都市は150から約1.5倍に増加しており、着実に世界に浸透していることがわかる（図2）。地域別ではヨーロッパの加盟都市が最も多く（加盟都市全体の8割超）、2012年から8年間で2倍に迫る227都市が加盟している。

次に伸びが顕著なのがアジアである。過去10年間で最も活発なのはトルコ（5→22都市加盟）であり、続いて東アジアでは韓国（10→15）、中国（1→11）、台湾（0→4）と続く。日本では2013年に国内第1号の気仙沼、第2号は2017年の前橋が参加している。

チッタスロー運動の興味深い点の一つが人口規模とその変化である。1999年の創設から10年余り経過した段階でのデータがある(図3)。イタリア国内の加盟都市の平均人口は、1万1千人に満たないほど小規模な町村である。イタリア以外の国・地域の加盟都市も1万6千が平均の人口規模である。いずれも日本の地方自治法の市の要件である5万人以上を満たさないで、日本でいえば町や村に該当する規模である。高齢層比率の高さと若年層の低さは、先進諸国の地方都市とほぼ同じ傾向がみられる。

注意を引くのは、チッタスロー加盟都市の人口増加である。これがどのような社会要因によるかはさらなる検討を要するが、外から人を呼び込む、あるいは住民が住み続けるような働きかけがあることは、後述のチッタスロー認証基準から十分に読み取ることができる(宗田2012: 84-91)。

## 2 チッタスローの精神—モダニティの裏をかく

チッタスロー運動の根底にある精神とは何か。数あるまちづくりや地域づくりと一線を画するこの運動の独自性とは何か。その答えの大きなヒントになるのが「チッタスロー宣言」である。誰が起草したのかは特定できないが、「チッタスロー憲章」を起草したオルヴィエート元市長のチミッキが手掛けたものと思われる(松永2010: 25)。

チッタスロー協会の公式ホームページサイトでは、イタリア語と英語のマニフェストが公表されている。読み比べると、イタリア語版の方が文章の完成度が高く、チッタスローの精神をよく表現している。またイタリア語版と英語版は、別の文章といてよいほどに表現が異なる。

なおチッタスローの先駆的運動のスローフード運動にもマニフェストが存在する。鋭い時代認識とユーモアに富んだスローフード・マニフェストは多くの話題を呼び、日本でもイタリア語から日本語に全訳され、注目されてきた(ペトリーニ2002; 島村2000; 金光/石田2004)。それに比べるとチッタスロー宣言は、後述するデザイン性の高いロゴマーク、詳細な認証基準、国際的ネットワークに比べると、宗田(2010: 80)と島村(2020: 36-7)を除いて言及されていない。だが、チッタスロー運動の根底にある精神を凝縮して表現しているのがこのマニフェストであるといつてよい。

その象徴がチッタスロー宣言の題目「スローを生きる—モダニティの裏をかく (Vivere slow: il controtempo della modernità)」に凝縮されている。注目したいのは「コントロテンポ」という語彙の選択である(宗田2010: 80)。「テンポを外す」「間合いを外す」の原義から、「意表をつく、裏をかく、スキを突く、虚をつくす」の意味が派生する。ボクシングで相手のカウンター攻撃に対処するための見せかけの動作、フェンシングやテニスでのフェイント、音楽で本来の場所から拍をずらしてリズムを変化させるシンクペーション、といった意味で使われる。対戦相手に真正面から勝負を挑むのではなく、かといって勝ち目のない相手に全面降伏するのでもない。「モダニティ」—後述するチッタスロー宣言のパー

ト 1 では「生産性を至上とする資本主義社会の結末」と理解できる—という対戦相手の出方をよく観察しながらつけいるスキをうかがい、間合いを外しながら相手のペースに巻き込まれることを避け、支配的な価値観の裏をかき、ここぞというときに意表をついた手を繰り出す。これがチッタスロー運動のあらゆる実践の根底にある「モダニティの裏をかく」の精神ではないだろうか。優雅で牧歌的な生活をイメージさせる「スローライフ」とは対照的に、チッタスローで「スローに生きる」とは、注意深さとしたたかさに裏打ちされた日常生活の営みなのである。

この「注意深さとしたたかさ」は、チッタスロー運動の母体となったスローフード運動にすでに存在している。スローフード運動は、1986年、マクドナルドのローマ初出店への反対運動に由来する（島村 2000: 49）。イタリアと同様にフランスでもマクドナルド反対運動が巻き起こり、「味覚と食の画一化」に断固反対する反グローバリズム運動であったことは共通する。ただし抗議のスタイルはイタリアとフランスで大きく異なった。フランスの反対運動はいわば直接行動型だった。農民リーダーのジョゼ・ボヴェとその同志たちが建設中のマクドナルド店舗をトラクターで破壊したことは、メディアでも大きく取り上げられた（アリエス/テラス 2002: 121）。しかしイタリアではより「注意深くしたたかな」戦略を選んだ。ペトリーニは「彼らは路上を走り回り、マクドナルドに対してゲリラ戦士的な戦略をとって」おり、「その考え方に私たちが魅了されることも多かった」として、フランスの反グローバリズム運動に共感しつつも、「それはスローフードのスタイルとは違っていた。スローフードは、好まない新しいものを追いたてるよりも、失われつつあるものを取り戻すことに努力を向けるほうを選んだ」と述べている（ペトリーニ 2002: 21）。マクドナルドという強大な対戦相手と直接対決する道をあえて選ばず、マクドナルドが画一化していく食のあり方を再生させる方途を選んだ。そして「味覚と食の画一化」に反対するだけでなく、「食のたのしみ」を肯定するための建設的で具体的な代替案を示そうとした（ペトリーニ 2002、2009）。これは短期戦では太刀打ちできない強敵を長期戦に持ち込み、勝機をうかがうといった「注意深さとしたたかさ」を要する戦略である。チッタスローの掲げる「モダニティの裏をかく」はこのスタイルを引き継いだことを意味している。

モダニティの裏をかくことの「注意深さとしたたかさ」に加えて、「ユーモア」「遊び心」「アイロニー」も重要な要素である<sup>2)</sup>。これもまたスローフード運動から継承されたものである。まずもって「スローフード」はイタリア語的な表現ではない（直訳すれば「チーボ・レンテ (cibo lento)」)。あえて英語表現の「スローフード」（イタリア人の発音だと正確には「ズローフード」と「ズ」が濁音になる）が使用されるのは、ファストフードが体現する近代の食システム—大量生産・大量流通・大量消費・大量廃棄—の「裏をかく」ユーモアが込められている。チッタスローもその精神を受け継ぎ、都市を意味するイタリア語の「チッタ (città)」と「遅さ」を意味する英語の「スロー」を組み合わせて、「チッタスロー (cittàslow)」とした（イタリア語の発音だと正確には「チッタズロー」）。イタリア語表現の「チッタ・レンテ (città lente)」でもなく「スローシティ」でもない意味のずらしと

ユーモアには、利便性と生産性を目指して加速する大都市の生活とは別の生き方を目指す意図が込められている<sup>3)</sup>。

こうした「注意深さとしたたかさ」と「遊び心」には、「ファスト」と「スロー」を完全な二項対立とみなさないかまえがあることにも注目したい。「ファスト」という対戦相手を完全否定するのでもそれに完全降伏するのでもなく、自分たちの都市というリング上に存在する「ファストなもの」の出方を見定めながら、しかしそのペースに巻き込まれないようにして、「スローな」ペースをつかんでいこうとする。「ファストかスローか」の二者択一ではなく、「ファストな世界でどうスローなペースをつかんでいくか」という発想で日常生活を組み直していくのが「スローを生きる」ことなのである<sup>4)</sup>。

### 3 「チッタスロー宣言」を読む

チッタスロー宣言は主に 5 つの内容から構成されている。日本語に全訳しても約 1,600 文字と短い。だがチッタスローの精神とその実践がよく表現されている。

「チッタスロー宣言—人間のあり方と住み方に関わる新たな人文主義のために」でこの宣言は始まる。イタリアの文脈で「人文主義 (umanesimo)」は、ルネサンスの幕開けを告げる人間性の再興と自己を中心に据えた学問のことを意味する。無論それは単なる人間中心主義ではない。むしろ諸学全般にかかわる教養を身につけながら、世界のなかでの自己の視点と立ち位置を批判的に認識する営みである。チッタスロー宣言の掲げる「新たな人文主義」とは、人間だけにとどまらず、生きとして生ける生命すべてのなかで人間存在のあり方と生き方を見つめ直すことが含意されているといえよう。

では最初のパートをみてみよう。

#### 【チッタスロー宣言 1】

チッタスローに暮らし、それを切り盛りしていくということは、生き方に関わることであり、日常生活を営む根幹に位置する。それはある点では今日までの支配的なやり方とは別のゆったりしたものである。せかせかしていて、生産性を最優先にしてスピードを競うものではなく、より人間味にあふれ、環境にやさしく、現在と将来の世代との絆をより強め、グローバルな相互接続を強めていく世界でローカルを尊重する態度である。チッタスローに暮らし、それを切り盛りするということは、大都会の住人を含めたすべての人々のために、経験、価値、英知、アート、科学的知識のぎっしり詰まった大きな知恵袋を運び届けていくことを意味する。そうしたものは、ささやかな中心であり、かつて周辺に追いやられた土地であり、今や中心地になりゆく田舎や辺境に存在している。

まず注目したいのが「チッタスローに暮らし、それを切り盛りしていく」である。この

フレーズが主旋律のようにマニフェストで繰り返される。とくに「切り盛りする (administrare)」は「統治すること」を意味する。ここにはチッタスローに暮らすということが、個々人の生活態度やライフスタイルといった私的問題にとどまらず、都市の自治 (ポリス)、地方行政府と不可分の関係にあることの強調である。チッタスローが基礎自治体を基盤に成り立っている由縁もここにある。

第2に、「生産性を最優先にしてスピードを競うものではない」ことは、生産性を至上とする資本主義社会の合理化に対する批判精神を表明している。これは「スローフード宣言」のなかで「ファストフードという問題、それを成立させている状況の問題」そして「規格・標準化された生産と消費主義を第一に考える工業化された農業や、はかない均一化された食への傾向」(金丸・石田 2004: 6-7) に対して批判的なまなざしをむけること、そして在来の多様な食材と食文化の援護を目指すスタンスを継承しているといえる。

「ローカルを尊重する態度」は、偏狭な地元自慢でなければ、単なる地元への愛着でもない。島村奈津は、地理学者の E. レルフの「没場所性の増殖」すなわち「個性的な場所の無造作な破壊と場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観の形成」(レルフ 1999: 20) と対比させながら、ローカルの均質化に抗うチッタスローの意義に注目する。「効率性を追求する大量生産と大量消費のあり方が、町や農村の風景までも均質化してきたのならば、そろそろ、この大人気ない均質化への迎合に抗い、日々の充足感を問うべきではないだろうか」として、島村は、イタリアのチッタスローの実践から日本で実行可能な取り組みを提言している(島村 2013: 265-285)。

ローカルを尊重する態度は、「あるもの探し」(吉村 2008; 結城 2009) とつながっている。小中規模の地方市町村では、交流の場や魅力的な個人店の浮き沈み、長期的スパンを要するエネルギーや水の問題が、大都市よりはっきり現れる。だがそれと同時に、課題に応答するための「経験、価値、英知、アート、科学的知識のぎっしり詰まった大きな知恵袋」もローカルに眠っている。それらを掘り起こし、「大都会の住人を含めたすべての人々のために」対外発信していくことが含意されている。

ただしチッタスロー運動は「地元にあるもの」を単に見つめるだけではない。ローカルの背後にあるグローバルな構造に対しても、ローカルと同じかそれ以上に注意を向ける。スローフード運動やチッタスロー運動の立役者たちにインタビュー調査をした日本人研究者が共通して指摘するのは、彼らの博識、視野の広さ、そして遊び心である。「スローを行動に移すということは、グローバルなメカニズムへの強い自覚と結びついて」(Roma et al. 2012: 22) おり、それはグローバル化のデメリットを最小限に抑えながら、テクノロジーや通信技術の利点は最大限活用しようという、現実的なスタンスである。「チッタスローを机上の空論で終わらせない」という創始メンバーたちの強い意志が表れている。

マニフェストの第2パートでは、過去・現在・未来の捉え方が特徴的に表現されている。

## 【チッタスロー宣言 2】





図4 チッタスローのロゴマーク

出典：以下のURLの無償ダウンロードから入手

<https://seeklogo.com/vector-logo/242947/cittaslow>

生活の質、関係性から織りなされる世界、そして農村や中山間や小さな島々に古くから伝わる数々の持続可能かつ社会経済的な運営方式を通じて、[チッタスローの生き方とやり方を]大都市の隅々まで浸透させていく。チッタスローで生き、それを切り盛りしていくとは、たえず未来に目を向けながら、できる限り最良のやり方で「今」という時間を生きることである。この時代が産み出したテクノロジーと文化の提供するチャンスを存

分に活かしながらも、民衆の歴史と物質文化が私たちにもたらしてくれた経験の遺産を決して忘れてはならない。

チッタスローは伝統的なものを重視するが、それは「中世に戻れ」という非現実的な提案ではない。また現在を否定した復古主義でもない。「たえず未来に目を向けながら、できる限り最良のやり方で「今」という時間を生きる」の内実は、オルヴィエート元市長チミッキが明瞭に語っている。チミッキは「歴史から継承した容れものとしてのまちの中身を、時代の要請に対応させて変化させるシステム」とチッタスローを定義する(松永2010:25)。過去の遺産と未来の可能性のどちらを選ぶかではなく、「現在のまち」という容れものなかで「テクノロジーと文化の提供するチャンスを存分に活か」し、過去と未来をたえず組み直すことが表現されている。

### 【チッタスロー宣言 3】

スローフードは在来種の農産物を護る大切さを教えてくれた。伝統的な調理方法や地元で採れた味に価値があることも知らしめてくれた。これを出発点として、様々な領域ですでに実現されており実証済みの極上の世界をチッタスローのなかから掘り起こしていく。食べ物、文化、社会的なつながりだけではなく、都市計画、環境、エネルギー、交通、観光、農業の世界、若者の教育、地域に人が住み続ける理由まで含んだモデルを提唱しているということは、ぜひ知っておいてほしいし、ぜひともそれを取り入れていくべきものである。

チッタスローで暮らし、それを切り盛りしていくということは、「よい暮らし」という近代的な幻想、つまりハイクラスな生活を送ることが住む人にとって最優先かつ誰もが望む約束である、というような従来の考えをある意味でおしまいにすることである。そして世界に向けて開かれていることと、何かに帰属しローカルの特殊性に誇りをもつこととの間にある偽りの矛盾を、建設的なかたちで解決していくことも意味している。

ここでチッタスロー運動がどこからどこへ向かおうとしているのかが具体的に言及されている。まずスローフード運動を母体としていることがロゴマークに端的に表現されている。スローフード協会のロゴマークであるカタツムリをベースにしたチッタスロー連合のロゴマークは、小さな街並みを背中にのせて進むオレンジ色のカタツムリ<sup>5)</sup>という親しみあるデザインである(図4)。日本の“ゆるキャラ”に近いと言えるが、その著作権と使用権限はチッタスロー憲章第4条で明確に定められている。

1 エネルギーと環境政策 12項目			
1 大気保全*	2 水質保全*	3 家庭の節水対策	4 ごみの分別収集*
5 産業および家庭におけるコンポストの推進	6 排水の浄化*	7 建物や公共システムにおける省エネルギー	8 公共の再生可能エネルギー生産
9 視覚公害(景観)・交通騒音対策	10 光害対策*	11 家庭の節電対策	12 生物多様性の保全
2 インフラ政策 9項目			
1 公共機関へのアクセスのよさ	2 サイクリングロードの拡大*	3 駅の駐輪場の設置	4 自家用車の代替交通手段の整備*
5 バリアフリー*	6 子供連れ家族や妊婦に対する対策*	7 医療サービスへのアクセス	8 市街地における商品流通の確保
9 日常ほか地域で働く住民の割合*			
3 都市政策の質 17項目			
1 都市の防災・復興計画**	2 中心市街地の質向上(標識・旅行者用看板・都市環境保全)*	3 生産植物/果樹や花木などによる社会的緑地帯の創出**	4 都市の暮らしやすさ(家事、介護、勤務時間その他)
5 周辺部の再評価および再利用*	6 ICT活用による市民/観光客のための双方向サービスの開発*	7 持続可能な建物(バイオ建築など)に関するサービスデスク*	8 ネットワーク網都市(ファイバー・オプティクス、ワイアレス)*
9 汚染物質のモニタリングと削減(騒音、電気システムなど)*	10 在宅勤務システムの開発	11 私的空間の持続可能な都市計画開発(パッシブハウスなど)	12 社会的インフラの推進(時間通過・フリーサイクリングなど)
13 公共空間の持続可能な都市計画(パッシブハウスなど)*	14 生産植物/果物による都市周辺部を含む生産的緑地帯の回復・開発*	15 ローカル商品の商品化にむけた取り組み*	16 個人商店や工房の維持・活性化・商店街の保護・活性化*
17 都市緑地帯におけるインフラ以外の建造物の数			

図5-1 チッタスローの認証評価基準

出典：チッタスローの公式ホームページおよび(大石2017: 132-133)。なお網掛け部分の\*は必須事項、\*\*は将来的に必要とする項目

4 農業、観光、伝統工芸に係る政策 10項目			
1 エコ農業の開発**	2 職人の技、手づくり、工芸品の保護(認証、文化博物館など)**	3 職人技、伝統工芸のブランド化*	4 田舎暮らしの質向上(住民サービスの充実)*
5 公共・コミュニティ食堂における地域産品の活用。可能であればオーガニック(学校給食など)*	6 味覚教育における地域産品の活用促進。可能であればオーガニック*	7 地域の文化イベントの保護および価値向上*	8 観光客の収容力(ベッド数、長期滞在型宿泊施設)*
9 農業における遺伝子組み換え種子の使用禁止	10 休耕地の新たな活用法		
5 ホスピタリティに係る政策 10項目			
1 歓迎体制(担当者の研修、看板、適切なインフラ、営業時間)*	2 オペレーター、貿易業者の意識向上(オファーや値付けの透明化、関税の明示)*	3 "slow"な旅行案内書の設置【印刷物、ウェブetc】	4 より重要な政策決定への住民参加の仕組みづくり
5 指導・管理者、雇用者へのスローシティのテーマに関する継続的な研修**	6 健康教育の実施(肥満、糖尿病との関わり)	7 住民に対するスローシティの取り組みに関する情報提供*	8 スローシティのテーマにかかわる団体の積極的な参加
9 スローシティ・キャンペーンへのサポート	10 公刊物やウェブサイトにもスローシティのロゴを使用すること*		
6 社会的包摂 11項目			
1 被差別マイノリティ	2 異文化圏/隣人	3 障がい者の包摂	4 子供のケア
5 若者の状態	6 貧困	7 自治会などの地域組織	8 多文化共生
9 政治参加	10 公共住宅	11 若者の活動拠点、青少年センターの設置	
7 パートナーシップ 3項目(地域食材・伝統食推進活動、スローフード理念普及のための協力)			
1 スローシティ運動と活動のサポート	2 自然伝統食品を促進する他組織との協働	3 発展途上国への協力・支援とスローシティの理念普及	

図5-2 チッタスローの認証評価基準 出典は図5-2と同様。網掛け部分の\*は必須事項、\*\*は将来的に必要とする項目

チッタスロー運動は、食の見直しを通じた生活様式全般の再吟味である。それを行政の声掛けや住民の心がけにとどめず、実現可能な「モデル」を提案していることが注目され

る。それが認証システムに具体化されている。

チッタスローの認証を得る入り口は、人口 5 万人以下で県庁所在地でないことが憲章の付帯第 4 条に定められている<sup>6)</sup>。さらに 7 つのカテゴリーのなかの 31 の必須項目（憲章の付帯 C）をクリアしなければならない（図 5.1 と図 5.2）。フランス発祥の「最も美しい村連合」の設ける認証基準<sup>7)</sup>と比べると、チッタスロー協会はかなり高いハードルを設けているといえる。申請から認証までの事務手続きは決して容易ではない（大石 2017: 134）。それがこのモデルを世界の小規模都市へ広めていくネックになっているともいえるが、それだけ厳格な質保証を担保しているともいえる。

カタツムリのロゴマークと認証基準が求める生活様式は、「「よい暮らし」という近代的な幻想」とは正反対のものとなるだろう。「もっと多く、もっと速く、もっと豊かに」を目指す消費社会に批判的なまなざしを向け、代替案となる実践を対置する方向性は、スローフード運動と共鳴するところである。

また第 3 パートでは、「世界に向けて開かれていることと、何かに帰属しローカルの特殊性に誇りをもつこととの間にある偽りの矛盾を、建設的なかたちで解決していく」という認識も提示されている。ここで「偽りの矛盾」とは、世界にも外部者にも開かれたコスモポリタンな態度と、自己完結した人間関係とよそ者を歓迎しない排他的な帰属意識との、擬似的な対立を意味している<sup>8)</sup>。それを「建設的なかたちで解決していく」とは、地元への郷土愛と世界へ開かれたつながりの構築を意識的に選択し実践していくことを宣言している。

第 4 パートでは、チッタスロー運動の「ヨコのつながり」が述べられる。

#### 【チッタスロー宣言 4】

同じ志と洞察を備え、真心からの歓待を共通の決まり事にすえて、現代の旅人を呼び集める用意の整った仲間をつくっていく。チッタスローで暮らし、それを切り盛りしていくとは、場所に眠る物質的および非物質的な資源の全体像を深く知ることである。そこには環境から自然の風景や都市の景観まで、歴史的・芸術的な財産から食を含んだ文化までが含まれる。近年の大変動によって危機にさらされている市民のアイデンティティを堅固なものにし、ある時にはそれを再構築するためである。

「仲間をつくっていく」は、小さなものがどのように強みを発揮していくかの一つの回答になっている。建築家の松永安光は、この運動が世界的広がりをみせていった「最大の原動力となったのは巧妙なネットワークの形成であった」と評価している（松永 2010: 30）。日本と比べてイタリアでは、中小企業や協同組合の分野で異種混合のネットワーク化が活発に行われているが、チッタスロー運動も同じように国内外で“小ささ”を強みに枝葉を伸ばしている。

だが国際的な「仲間づくり」が成立するには、国や文化を超えたヴィジョンが必要になる。チッタスロー運動の魅力の1つは、スローフードと同様に、ヴィジョンの包括性と普遍性にある。「場所に眠る物質的および非物質的な資源の全体像を深く知る」「文化までが含まれる」という宣言は、分業や専門分化とは真逆の視野の広いヴィジョンを表明している。このヴィジョンの包括性と普遍性がイタリア以外の小さな都市でも受け入れられる素地を提供している。近代科学の専門知識というより「人文学的な」スタンスと教養の上に成り立つ見通しといえる。

最後のパートでは、「スロー（遅さ）」を中軸とした価値言明が表明される。

### 【チッタスロー宣言 5】

チッタスローで暮らし、それを切り盛りしていくとは、「遅さ」を価値の中心に据えるということだ。歴史、文化、環境のために、20世紀の加速化にこれまでも、そして今も抵抗する人々がいる。かれらの挑む時間の革命に対して、[チッタスローの運動は]完全かつ具体的な意味を与える。歴史の時間と近代の時間、自然の摂理と文化と生態系の一部としての経済原理を調和させることを意味している。要するに、チッタスローに生きてそれを切り盛りしていくとは、市民生活に関わる全部門の質を組み立て、リズムを減速させ、忙しさとたたかいながら、これまでも、そしてこれからも、都市と世界の風味、色彩、においを味わうための時間を与えることなのだ。

「速さ」ではなく「遅さ」を、「加速」ではなく「減速」を価値の中心に据える。なぜか。それは「より速く、より高く、より強く」を至上命題として、「経済成長」「進歩」「成功」の実現に向けて疾走してきた近代社会が大きな分岐点に差し迫っていることを、この運動は正面から問い直そうとするからであろう。チッタスロー宣言の根底には、「今」という時代に対する危機意識と同時に、今とは別の方法で生きる意志が脈打っている。

ただし「遅さ」を価値の中心に据える」は、進歩からの後退、発展とは別の停滞と誤解されるかもしれない。こうした誤解の背後には、まるで短距離走のように、既に引かれた直線を一方向に前進することだけが社会発展であり、それ以外は「失格」とみなすような価値前提から抜け出せないことから生まれるものである。むしろここでいう「遅さ」「減速」とは、「足し算の進歩」からの逸脱ではなく、ダグラス・ラミスと文化人類学者の辻信一が述べる「引き算による進歩」に近いものである。

我々は機械技術にますます依存し、従属するようになって、その結果人間としての能力は萎縮し、人間同士の関係や自然との関わりはより狭く浅く窮屈なものになっている。この機械がないとこれができない、あの機械がないとあれができない、というふうに。そこで物を少しずつ減らして、そのかわり、物がなくても平

気な人間になったらどうだろう、とラミスは言う。人間の能力のかわりをする機械を減らして、人間の能力を伸ばすような道具を増やす。テレビをつけて「文化」を見るのではなく、自分の家で文化を創る。本来の意味における文化——自前で生きていることを楽しむ能力——を取り戻すのだ、と（辻 2001: 240-241）。

「都市と世界の風味、色彩、においを味わうための時間」も持てない（あるいはそうした感覚自体を失っている）ほど「忙しい」現代社会で、「よく生きる」とはどういうことなのか。いかにして私たちは「よく生きる」ことができるのだろうか。チッタスローという壮大なヴィジョンを「絵に描いた餅」にしないためには、どのような具体的取り組みが必要なのか。以上からチッタスロー宣言の提起する根本問題は次のように要約することができる。すなわち、現代の高度消費社会において“小さな都市”で「よく生きる」ことは、いかにして可能か、である。

とはいえチッタスロー運動は順風満帆というわけではない。課題の一つに住民参加が挙げられる（大石 2017: 137）。たしかにこの運動は、中央政府の号令ではなく地方自治体長の発意から始まったので、中央—地方関係でいえば「下から」のボトムアップ型運動である。ただし地方自治体—住民関係でみた場合、もし住民意識や参加が希薄のままであれば、市長のトップダウンによる「上から」の運動に映る。チッタスローの理念と実践を住民がどれだけ「わが町のこと」「自分事」として受けとめられるか。これが大きなポイントになる。チッタスローの認証は「ゴール」ではなく、「スタート」であり、その後のプロセスにいかにより市長・自治体・住民が協働関係を築いていけるかが勝負になる。

もう一つの課題は、持続可能性である。繰り返し述べてきたように、チッタスローの取り組みは、地方自治体と市長が制度上のかなめの位置を占める。それゆえ選挙による市長の交代や組織上の人事異動の如何によっては、チッタスローの政策上の優先順位が低くなることは大いにありうる。実際にオルヴィエートでは、町の魅力の一つだった腰かけベンチの3分の1が市政の交代により撤去されたことを、島村は報告している（島村 2020: 38）。地方政治の施政方針の変化は避けられないことを前提としたうえで、それでもなお、政治の浮き沈みとは別個の日常の次元で、チッタスローという容れものに地域住民が魂を吹き込んでいくことが、非常に大事になるだろう。

こうした課題はあるにせよ、イタリアの小さな地方自治体から始まったこの運動は、私たちに核心的な問いを投げかけていることには変わりない。チッタスロー運動の目指す「よく生きる」はいたってシンプルな表現である。だがそれは古代ギリシャにまでさかのぼる根本的な人間集団への問いかけである。『政治学』第3巻第6章のなかでアリストテレスは、「よく生きる」（ビオス）と「ただ生きている」（ゾーエー）を対置させて論じている<sup>9)</sup>。現代の高度消費社会で生きる私たちは、「よく生きる」ことを意識することがほとんどなく、もしかすると「ただ生きている」だけなのかもしれない。チッタスロー運動は、「遅さ」「減速」という価値を正面に据えながら、「よく生きる」とはどういうことなのかを考える時間

を提供し、「よく生きる」という具体例を中小規模の都市の日常生活から実践している。

#### 4 結びに代えて—大学生とつくるチッタスロー

最後に前橋赤城スローシティと大学教育をつなぐ実践を紹介して結びに代えたい。共愛学園前橋国際大学では地域での主体的な学びを積極的に展開しており、これまでに商店街が立地する中心市街地、過疎化が進む県境の中山間地、世界遺産を有する県内観光地が主な地域学習の場となっていた。だが大学から北方面に約7~20kmとそれほど遠くないはずの前橋赤城エリアは、単発のイベントやボランティアへの参加を除けば、「自宅から通学までの通過点」「近くて遠い場所」だった。

2017年に前橋市は赤城山南麓を対象エリアとしてチッタスローに加盟した。イタリアの加盟当初の4基礎自治体と日本の2加盟都市を比べると、若年世代の住民比率が低いことがわかる(図6)。先に述べたチッタスロー宣言の第3パートと認証基準の「6 社会的包摂」には「若者」を巻き込む活動が明示的に盛り込まれているが、前橋赤城スローシティ地区の抱える共通課題が「人手不足」「若者が少ない」「活動のマンネリ化」であることが指摘されている(呉・奥田・大森 2018: 72)。今後も人口減少の傾向は続くことから、もし何も手を打たなければさらなる若者離れが予想される。

	オルヴィエート <sup>1)</sup>	グレーヴェ・イン・キャンティ <sup>1)</sup>	ブラ <sup>1)</sup>	ボジターノ <sup>1)</sup>	前橋赤城スローシティ <sup>2)</sup>	気仙沼市スローシティ <sup>3)</sup>
人口 2018	21480	13803	29656	3898	57584	61744
人口 2008	21130	14262	29608	3970	61416	73489
過去10年間の人口増減	+1.7%	-3.22%	+0.16	-1.81%	-6.2%	-16.0%
65歳以上の割合	28.2%	25.0%	23.6%	21.7%	29.4%	35.0%
17歳以下の割合	13.7%	15.3%	16.4%	15.9%	11.5%	10.1%
外国人居住者比率	10.1%	12.0%	13.6%	4.8%	---	----
面積	281.27 km <sup>2</sup>	169.37 km <sup>2</sup>	59.53 km <sup>2</sup>	8.65 km <sup>2</sup>	172.15 km <sup>2</sup>	332.44 km <sup>2</sup>
人口密度 千人/km <sup>2</sup>	71.6 km <sup>2</sup>	81.57 km <sup>2</sup>	498.2 km <sup>2</sup>	450.5 km <sup>2</sup>	334.5 km <sup>2</sup>	185.3 km <sup>2</sup>

図6 イタリアと日本のスローシティの人口規模・推移・比率・密度の比較

出典：1) 2018年のデータは<https://ugeo.urbistat.com/AdminStat> 2008年のデータは <https://www.tuttitalia.it/> に依拠。

2) 前橋市住民基本台帳記録人口表(令和2年4月30日現在、外国人住民を含む)および前橋市住民基本台帳記録人口表(平成22年4月30日現在、外国人登録人口は含まない)に依拠して作成。なお富士見地区から時沢、原之郷、横室を除外した人口を推計 3)H27国勢調査の数値に依拠して作成。

本学の学生が「関係人口」として前橋赤城スローシティにかかわるとどうなるだろうか。地域での学びに加えて、前橋赤城地域と若者を結びつけることがチッタスローの理念にも合致するのではないだろうか。こうした問題意識のもとに、筆者のゼミナールでは、2018年から「スロー」をテーマとした教育と調査研究を進め<sup>10)</sup>、これまで筆者の進めてきたイタリアと日本での地域調査と教育(鈴木 2018、2019)を土台に、前橋赤城スローシティエリアをフィールドとしたプロジェクトを企画した。「地域での「深い学び」にむけた調査・教育・地域の好循環の質的研究」と題して本学の教育プロジェクトに申請し、次のような

目的を据えた。

本研究の目的は、地域での「深い学び」を目標とする調査・教育・地域貢献の好循環のプロセスを、「ぶ厚い記録」と「入念なりフレクシオン」から明らかにすることにある。本学は、国内外の地域をフィールドとした体験学習を多数展開している。この取り組みをさらに深めていくためには、学習の「成果」だけでなく、その「過程」に注目する必要がある。なぜなら地域での学びの具体的なプロセスのなかで、試行錯誤、失敗、気づき、発見、成長を学生はすでに実感しており、それらの体験から何を学んだのかを何度もふりかえることで、「深い学び」が身体化されるからである。ここで学びの導き手となるのは地域の人々であるため、「深い学び」にはフィールドからの信頼と協力が欠かせない。また研究者は調査者としてのみならず、地域と大学のつなぎ手としての役割が求められる。教員・学生・地域が各自の持ち場で固有の役割と責任を果たすなかで、調査・教育・地域の好循環が構築されるのではないだろうか。ここで核となるのは、フィールドノートへの「ぶ厚い記録」と Kyoai Career Gate (学習成果の可視化を目的としたポートフォリオ、以下 KCG) を活用した「入念なりフレクシオン」である。学びのプロセスを学生全員がフィールドノートに記録し、KCG に蓄積し、入念なりフレクシオンを行うことで、体験の意味を言語化し、対外的に表現し、地域の人々と共有する。学びの現場は「前橋赤城スローシティ」のエリアに設定しており、すでに「合同会社・前橋赤城古民家 IRORI 場」と「NPO 法人赤城自然塾」には本研究の拠点として協力いただく合意を得ている。

研究計画	研究現場	学内 課題演習 (鈴木ゼミ)	地域 前橋赤城スローシティ
①地域でのフィールドワーク		ゼミで企画・立案・実施	赤城山IRORI場、赤城山自然塾
②ぶ厚い記録		授業内外学習時間にてフィールドノートの作成・蓄積	現場メモ、画像・動画・口述データ、現地資料の収集・蓄積
③入念なりフレクシオン		KCGに②を蓄積し、ゼミ内および授業外での深い議論と省察	インフォーマルな談話や各種現場作業の「舞台裏」での交流
④公表とフィードバック		シャロン祭展示、報告書、本学HP、『共愛前国大学論集』論文	赤城山IRORI場でのイベント開催または成果発表

図7 地域での「深い学び」を達成するための研究計画・現場・方法

そして以下のような方法でプロジェクトを進めることとした。

本研究目的を達成するために、4段階の研究計画と2つの研究現場を設定し、

計 8 ユニットに即した研究方法を採用する (図 7)。①「前橋赤城スローシティ」地区を対象に“スローな (持続可能で適正規模の) 地域づくり”にむけた実地調査を実施する。調査は課題演習 (鈴木ゼミ) を拠点に進める。地域連携の主体は「前橋赤城古民家 IRORI 場」と「赤城自然塾」である。本研究の核となるのが、②ぶ厚い記録と③入念なりフレクションである。調査参加の学生すべてがフィールドノートを作成して KCG に掲載する。授業内外の時間では、②を基礎資料として、「自分自身の変化」と「フィールドの人々との変化」の深い議論と省察を幾度も行い、地域の人々とも知見を共有する。④本研究の成果について、学生は学園祭と報告書で、教員は本学 HP と論集で発表する。それらの知見は地域での発表会を企画・運営して公表する。

さらに学生たちも自主的に活動を始めた。3 年のゼミ生は学生主体の企画事業に対して大学が助成する「共愛学生プロジェクト」に応募した。次のような目標を設定して、2020 年 4 月から「共愛 × IRORI 場 Slow City Project」をスタートさせることになった。

本プロジェクトは、前橋富士見地区で築 130 年の古民家を改装した民泊「赤城山古民家 IRORI 場」(以下 IRORI 場) の協力を得ながら、学生主体で地域づくりへの参加と学習を行うことを目的とする。2019 年 10 月に開設された IRORI 場は、国内外のインバウンドの宿泊地と同時に、前橋赤城スローシティの「入口」をつくることを目指している。達成の目標は、フィールドワークをもとに「散策マップ」と「体験プログラム」の企画・立案・実施・運営を行うことである。

以上のプランで活動を始めようとした矢先に、新型コロナウイルスの世界的流行に見舞われた。本学も例外ではなく、大学の授業はすべて遠隔方式となり、ゼミと地域学習の実施も困難を極めることになった。しかしゼミでは「新型コロナウイルスのせいで何もできない」と考えるのではなく、「この状況でもできることは何か」を各自で考えて、ゼミで相談しながら実践していくことになった。「〇〇〇がないから×××はできない」ではなく、「〇〇〇はなくても△△△はできる」という発想転換が、「ないものねだりの愚痴」ではなく「あるもの探しの自治」(吉本 2008: 24) であり、チッタスローの精神にも一脈通じる考え方である。

幸いなことにゼミナール活動は 5 月中旬から対面で実施できるようになり、感染予防に留意しながらの課外活動も可能になった。インフォーマントとなる前橋赤城古民家ゲストハウス IRORI 場との信頼関係を築き、現地で複数回のフィールドワークを実施し、「分厚い」フィールドノートを蓄積していった。夏には宿泊の合宿ができない代わりに、オンラインでのワークショップの実施、大学に地域のキーパーソンを招いて中間報告会を行い、散策マップの作成を進めた。2021 年 2 月現在、若年層をターゲットとした「インスタ映え



散策マップ」の仕上げ段階に入っている。年度内の完成を目指し、日本語・英語・中国語・イタリア語の4カ国語のマップを発表する予定である。

付記：本研究は、共愛学園前橋国際大学の教育改革支援費の成果の一部である。また拙稿に対して査読者から貴重なコメントを頂いた。記して感謝申し上げたい。

## 注

- 1) 本章の記述は (Roma et al 2012: 25-26) に依拠している。ただし、チッタスロー運動の誕生経緯について、1997年当時のオルヴィエート市長チミッキの発言を受けて実現に動いたパオロ・サトゥルニーニ (当時のグレーヴェ・イン・キャンティ市長) だと、島村は論じており (島村 2020: 36)、Roma et al (2012: 25) の記述と齟齬がある。
- 2) 辻信一は、スローフード運動には「ユーモアがあふれている」として、その理由を「この運動が、食という快楽を肯定することを基本として、その一点において結びつこうとしているからだと思う」と論じている (辻 2001: 51)。島村奈津は、スローフード宣言の起草者である詩人ポルティナーリの「スローフード運動は、人間の崇高な遊び心に支えられるべきなんだ。遊びを宗教に変えてはいかん」という発言を記録し、この運動がエリート主義、商業主義に変質することの危惧を伝えている (島村 2000: 266-7)。
- 3) スローフード運動およびチッタスロー運動と「合理化」「マクドナルド化」との関連については、ジョージ・リッツァの「合理化」「マクドナルド化する社会」(リッツァ 1999) と関連させた考察を別稿にて論じたい。
- 4) ファストとスローは、実際の生活ではコインの裏表のような分かれ難い関係である。だが分析的には、別種の特徴をもつ現象として区別されうる。例えば、以下の整理を参照。

	ファスト	スロー
外食	ファストフード	スローフード
内食	インスタント食品	オーガニック食品
衣	カジュアル	自然素材、ファッション文化の多様化
住宅	近代合理主義建築	伝統建築再生、町並み再生、町家レストラン、町家・民家再生
農業	高投入 (高収穫量)・高収入の集約農業	低投入 (低収穫量)・中収入の環境保全型農業、有機農業
工業	大量生産・大量消費・大量流通	多品種少量生産、職人企業、産業地域ネットワーク
都市	機能主義・土地利用の純化、工業都市、世界都市	歴史都市再生、ミックスド・ユース (混合用途)、脱クルマ社会、創造都市
観光	マスツーリズム	オルターナティブツーリズム、アグリツーリズム、エコツーリズム

出典：(宗田 2012: 102) から引用

	従来の企業中心型の発展	オルタナティブな発展
特徴	同質なもの	特異なもの
	支配的な利害関心に基づく	多種多様な利害関心に基づく
	不平等	平等
	工業的	職人的
	標準化	個性化
	企業経営	自発的、「下から」の発意
	持続可能ではない	持続可能である
	繰り返される	真正性がある
	質の低さ	質の高さ
	模倣可能である	特別である
	ローカルの歴史と文化への低い関心	ローカルの歴史と文化への高い関心
	速さ	遅さ
事例	巨大都市プロジェクト	地域社会の発展
	工場誘致	スローシティ
	食品産業の生産	スローフード

出典：(Roma et. al. 2012: 29)から引用。なおRomaは以下の論文を参照している(Mayer, H and P. L. Knox, “Slow cities : sustainable places in a fast world”, *Urban Affairs*, 28(4): 321-334, p.235)

- 5) スローフード宣言は、20世紀初頭に機械文明と速度の賛美を掲げた詩人マリネッティの「未来主義 (futurismo)」宣言に対するユーモア溢れるアンチテーゼである(島村2000)。カタツムリというシンボルは、未来主義の象徴である「スポーツカー」と対置関係にある。なおトロブリアンド諸島のクラ交易に関する文化人類学的研究は、「カタツムリと空」という寓話が「らせん思考とリニア思考」の緊張関係にあることを明らかにしている(中沢2010: 432-3)。カタツムリが「速度礼賛」「スポーツカー」「リニア思考」に対置するシンボルとして選択されることは興味深い。
- 6) 前橋市のケースが興味深いのは、チッタスロー国際連盟の定める認証基準の「人口5万人以下」「県庁所在地でない」のいずれも満たしていないことである。前橋市は人口約33万(2016年当時)であり、群馬県の県庁所在地を有する。そこで前橋市および山本龍市長は、人口約5万7千人の赤城南麓エリアを加盟申請地区に指定することにした(山本2018: 90)。それでも5万人以上であり、県庁所在都市であることには違いないが、認定された。なお第1号認定の気仙沼市についても、加盟申請時の人口は約7万である。それゆえチッタスロー国際連盟の認証は、杓子定規ではなく、柔軟に行っていると推論する。

- 7) 「日本で最も美しい村」連合は、①人口がおおむね1万人以下、②地域資源が2つ以上存在、③連合が評価する地域資源を活かす活動がある、を主な加盟条件に設けている。群馬県内では、昭和村、中之条町伊参、中之条町六合の3つが加盟している。なお加盟条件は、認証事業を一括管理しているチッタスロー国際連盟と異なり、フランス、イタリア、スペイン、日本など各国によって異なる。
- 8) ここでの「偽りの矛盾」は、ブリュノ・ラトゥールのいう「マイナスのグローバリゼーション」と「マイナスのローカル」の対立構図に似ている。グローバリゼーションがもはや豊かな生活や自由を実現できずに、むしろ格差拡大や自由の制限に反転していくと、それへの「逃走」として、「伝統、保護、アイデンティティ、つまり国境あるいは民族自治の境界のなかでの確実性」が魅力的に映る。ここにグローバル主義を唱道する「進歩主義者」と排他的なローカルに回帰する「復古主義」の対立が起こる（ラトゥール 2020: 54）。自国第一主義、反EU、移民排斥を掲げるイタリアの北部同盟の躍進は、チッタスロー運動が危惧していた「偽りの矛盾」の政治化に成功した例といえる。チッタスロー運動の目指すのは、排他的なローカルへの自己完結ではもちろんなく、ラトゥールが第3のアトラクターと位置付ける「テレストリアル」（大地に根ざすあらゆる地上の存在、およびその総称としての地球）の共存はいかにして可能か、である（ラトゥール 2020: 67）。
- 9) ジョルジョ・アガンベンは、古代ギリシャの「よく生きる」と「ただ生きている」の区別を、近現代社会の「生」をめぐる政治の根本問題に位置づけた（アガンベン 2003）。「よく生きる」ことは、ポリス（都市）のあり方と不可分である。チッタスローの掲げる「よく生きる（*buon vivere*）」は、現代社会のあり方をローカルの居住場所から問い直す試みといえるだろう。
- 10) 2019年度および2020年度のゼミ生は「スロー」と関連させた卒論を書き上げた。次のような卒論題目である。
- 「裏地に隠された服の価値—若者の衣服消費行動のアンケート調査から未来のファッションを創造する」「人のいる食文化としてのスローフード—群馬の農業体験プログラムを事例に」「あなたにとって居心地のよい場所がありますか？—地方都市のサードプレイスに関するアンケート調査から考える」「スローライフをデザインする—スローカフェから考える」「ビジネスの融合でつくる「たのしい仕事」の価値観—スロービジネス実践者へのインタビュー調査から考える」「ファストビジネスに挑戦する「スローな」働き方—地域活性化に取り組む群馬企業へのインタビュー調査」「現実と理想の間のスローシティ—前橋赤城スローシティの取り組みを事例に」「未来をつなぐスローシティ—前橋赤城と韓国・鳥安を比較して」「超消費社会における生き方のアップデート—「雑」を強みに生きる人々から学ぶ」（以上、2019年度の卒論、9名）。「おいしい」「楽しい」スローフードの逆襲—欧州及び群馬のフードツーリズムから再認識する「食」の魅力」「おいしいファストフード」の悪影響—若者世代のインタビュー調査」「パッケージの

ない世界—ごみ自体を出さない「ゼロ・ウェイスト・ライフ」の無理しない挑戦」「現代中国社会におけるライフスタイルの南北差異—福建省と吉林省の親子世代の女性ライフストーリー調査」「「疲れる」居心地の良い場所を探して—大学生とアウトドア系サードプレイスの可能性」「大学生のまちづくりで前橋は「めぶく。」か？—前橋中心商店街と前橋赤城スローシティ・宮城地区のインタビュー調査」（以上、2020年度の卒論、6名）。

## 参考文献

- アガンベン、ジョルジョ（2003）『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』（高桑和巳訳、上村忠男解題）以文社
- アリエス、ポール／テラス、クリスチアン（2002）『ジョゼ・ボヴェーあるフランス農民の反逆』（杉村昌昭訳）つげ書房
- 久繁哲之介（2008）『日本版スローシティ—地域固有の文化・風土を活かすまちづくり』学陽書房
- 金光弘美／石田雅芳共著（2004）『スローフード・マニフェスト』木楽舎
- 加藤基樹／植杉大（2016）「宮城県気仙沼市にみる震災復興のまちづくりの理念と実践」『撰南経済研究所』第6巻第1・2号、49～61頁
- ラトゥール、ブリュノ（2020）『地球に降り立つ—新気候体制を生き抜くための政治』（川村久美子訳・解題）新評論
- 前橋市観光振興課（2019）『2019 スローシティ国際会議報告書』前橋市役所ホームページ [https://www.city.maebashi.gunma.jp/material/files/group/53/2019cittaslow\\_assembly\\_report.pdf](https://www.city.maebashi.gunma.jp/material/files/group/53/2019cittaslow_assembly_report.pdf) 2020年11月30日アクセス確認
- Manella, Gabriele, “Cittàslow: the Emilia-Romagna case” Michael Clancy (edit.), 2018, *Slow Tourism, Food and Cities: Pace and the Search for the “Good Life”*, Routledge.
- 松永安光・徳田光弘（2007）『地域づくりの新潮流—スローシティ／アグリツーリズム／ネットワーク』彰国社
- 松永安光（2010）「スローシティを生まだしたもの」『日伊文化研究』（48）、22～31頁
- 宗田好史（2012）『なぜイタリアの村は美しく元気なのか—市民のスロー志向に応えた農村の選択』学芸出版社
- 中沢新一（2010）「解説」B.マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』（増田義郎訳）講談社学術文庫
- 呉宣児／奥田雄一郎／大森昭生（2018）『前橋市の地域づくり事典—「家に住む」から「地域に住む」へ』上毛新聞社
- 大石尚子（2017）「農村における創造的暮らし—ひとと地域を育むアソシアシオン」大森彌／小田切徳美／藤山浩（編著）『世界の田園回帰 11 ヲ国の動向と日本の展望』農文協、118～148頁

ペトリーニ、カルロ (2002) 『スローフード・バイブル—イタリア流・もっと「食」を愉しむ術』(中村浩子訳) NHK 出版

—— (2009) 『スローフードの奇跡—おいしい、きれい、ただしい』(石田雅芳訳) 三修社

レルフ、エドワード (1999) 『場所の現象学—没場所性を越えて』(高野岳彦／石山美也子／阿部隆訳) 筑摩書房

リッツァ、ジョージ (1999) 『マクドナルド化する社会』(正岡寛司監訳) 早稲田大学出版部

Roma, Giuseppe et al. 2012, *Cittàslow dall'Italia al mondo : La rete internazionale delle città del buon vivere*, FrancoAngeli.

島村奈津 (2000) 『スローフードな人生！ イタリアの食卓から始まる』新潮社

—— (2013) 『スローシティ—世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』光文社新書

—— (2020) 「グローバリズムとイタリアの幸福な町づくり スローシティ」『都市計画』347号、Vol.69(6)、36～39頁

陣内秀信 (2006) 『イタリア小さな町の底力』講談社プラスアルファ文庫

—— (2010) 『イタリアの街角から スローシティを歩く』弦書房

鈴木鉄忠 (2018) 「「地域での学び」をふりかえる—「フィールドワークの方法」の授業における「失敗体験」を事例に」『共愛学園前橋国際大学論集』(19)、131～153頁

—— (2019) 「「本物を見た！」—「真正性」と「観光のまなざし」の間の海外体験学習」『共愛学園前橋国際大学論集』(20)、177～198頁

Tranter, Paul and Rodney Tolley, 2020, *Slow Cities: Conquering our Speed Addiction for Health and Sustainability*, Elsevier.

辻信一 (2001) 『スロー・イズ・ビューティフル—遅さとしての文化』平凡社

山本龍 (2018) 『みんなでつくる地方自治と手引き—まえばしインデックス 2019』ぎょうせい

吉本哲郎 (2008) 『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書

結城登美雄 (2009) 『地元学からの出発』農文協

チッタスロー連合の公式ホームページに掲載のチッタスロー・マニフェスト

<https://www.cittaslow.org/manifesto> 2020年11月30日現在アクセス確認

### **Abstract**

## **How can Small Cities Survive in a Globalized World?: The Italian Cittàslow Movement and its Implications**

Tetsutada Suzuki

Whereas the accelerating pace of globalization has challenged the very existence of small cities, the Italian-modeled slow cities movement since 1999, Cittàslow, has proposed alternatives to the sustainable way of local life. As of 2021, this movement had spread to an international network of 30 countries and territories and 272 cities, reaching as far as Japanese local administrations, such as Kesenuma city (Miyagi Prefecture) in 2013 and Maebashi city (Gunma Prefecture) in 2017. The creative idea and practices of living slow, nevertheless, are less prevalent in Japan, not only amongst the public but also amongst inhabitants living in the slow cities. This paper tries to understand the philosophy of the Cittàslow movement through careful reading of its “manifesto”, written solely by Italians. Considering the essence of this movement to be “the counterpart of the rationalization of everyday life,” we clarify the conditions under which the Italian slow-city model is applicable to small cities in Japan.